

江の島

長唄

全詞章

作詞者・作曲者不詳

〔次第〕 筆も及ばじ江の島の、筆も及ばじ江の島の、歩みも軽き余情かや

〔本調子・唄〕 砂路遙かに見あぐれば、天女まします島蔭に、並ぶ妹背や男山、いつも二十の名にふれし、緑に目だつ額ぎは

うつる浪間の海士小舟、中を結びし魚の糸、人手に掛けて引く網に、かかる拍子の浜唄や

〔二上り〕 濡れたヨ袖なら思ひの淵はヨ、あけし真砂の数よりも、しよんがいな、只いつとなく

島の本

〔本調子〕 先づ拝せんと岩清水、心住吉あら神の、石は蝦蟇なる形にて、蝦蟇とは蛙の言の葉は、実にも興ある案内の子等と、笑ふ門なる福石の

辺尋ねて通宝の、文字の徳を得たりしは、外にも類も地震知らぬ、山とは更に事そへて

〔恋〕 うごく心の月の影、忍ぶの乱れ乱れかかりし村雲の

迷ひの空や児桜、咲くも咲かぬも白菊の、しのぶの里に人間はば、思入江の島と答へよ、恋路の闇はありがたき、光にはれて影向の、岩ぞ神威のかたえなる

〔祭礼〕 そも当社両度の御祭は、本宮御旅所四神の旗、神幸其の日の巳の刻に、龍窟よりも渡らせ給ふ、警固りりしき櫛の仕丁白幣

勢たつる獅子頭、神具神宝行儀にそろへ、海岸峨々たる巖上を、恒々として嚴重たり、

研にひびく磯辺にも、浪の鼓の海青楽

〔結び〕 蓬莱堂には鶴の舞ふ、此方は輝く金亀山、実にあたらなる金銀珠玉、十分に積み重ねたる富貴の鳥山

妙音菩薩の調べも松に、吹きつたへてぞ限りなく、その節言の糸竹も、すぐなる神の誓なるべし